

17ちゃんの報告

晴耕雨読

2021/3/10

「東日本大震災 10年目に思う」No1

前川 義信

2011年3月11日の震災は、東北の人々の生活とそこに住む人々の命を奪ってしまいました。

私たちは、それ以来原発問題や自然災害と向き合わなければならない時代に入ったようです。

9日の河北新聞夕刊に作家の三沢陽一さんが次のような言葉を記していました。

～絶対に忘れられない日。絶対に覚えていなければいけない日。絶対に人に伝えていくべき日。それが3月11日である。～

この言葉に私の目は止まってしまいました。

それで、今回はこの東日本大震災を取り上げ、発災から10年目の節目で、私が記録してきた被災地の星空を絡めて、これまでの状況をたどっていききたい。

震災後星好きだった私が、2年間何も記録がありませんでした。多くの人たちもそうであったように、私も星仲間を亡くし、教え子を無くし、撮影の気が全く無かったのです。

撮影したいという気持ちが芽生えたのは、2013年4月28日に多賀城市にある政庁跡に行き、満開の桜を見ることができてからでした



政庁跡の桜

そのとき見た桜の美しさに心が洗われ、何か元気をいただいたような気持ちになり、その桜を撮影したい欲求に駆られました。

そしてもう一つ、同じ年の5月4日気になっていた初任校のある女川へ行った時のことです。瓦礫が片づいた女川の町は何もかも無くなっていて、30数年前の面影はありませんでした。その様子を見たとき、被災地の上にある星空は、どんな輝きを放っているのだろうと気になり始めました。



船の出港待ちに使われる江島共済会館

そして、決定的だったのは、2014年8月31日に参加した山元町震災被害見学バスツアーでした。その中で、現在震災遺構になった、中浜小学校の校舎を語り部の話を聞きながら巡回し、3つの軌跡が重なって90名の児童たちの命が救われた話を聞いたことでした。私の気持ちは、迷い無く被災地の星空撮影に向かって動き出しました。続く



被災した中浜小学校